東大寺の大仏殿は戦で二度焼け、そのたびに建て直しが始まった

東大寺の大仏殿は、戦の火で二度焼けました。一度目は治承四年（1181年）の十二月、平重衡が奈良へ攻め込んだときです。二度目は永禄十年（1567年）、大仏殿に陣取った三好三人衆を、松永久秀が夜討ちにしたときでした。

どちらのあとにも、建て直しが始まったのです。

The Great Buddha Hall of Tōdaiji burned twice in the fires of war. The first time was in the twelfth month of the fourth year of Jishō, 1181, when Taira no Shigehira marched on Nara. The second was in the tenth year of Eiroku, 1567, when Matsunaga Hisahide made a night attack on the Miyoshi Three, who had made camp in the Great Buddha Hall.

After each, rebuilding began.

治承四年十二月二十九日、藤原兼実は、知らせを聞いた日のことを日記『玉葉』に記しています。興福寺・東大寺などの堂は地を払って焼けた、と人が告げたそうです。兼実は「當時之悲哀、甚於喪父母」（いまの悲しみは、父母を亡くすよりも深い）と記しました。そして「猶々大佛再造立、何世何時哉」（大仏を造り直すのは、いつの世、いつの時になるのか）と嘆いています。その後、東大寺の記録の大仏の項には、俊乗房重源が勧進（寄付を集めること）して建立したと記録されています。その供養は、建久六年（1195年）三月十二日でした。

時は下って永禄十年（1567年）十月十日の夜、多門城の松永久秀が、大仏殿に陣取った三好三人衆を攻めました。『多聞院日記』によると、戦の火は回廊へ燃え移ったそうです。「丑剋ニ大佛殿忽燒了」（夜更けに、大仏殿はたちまち焼けた）。

奈良の井上町の記録は、大仏殿の再建のための托鉢（僧が家々を回り、食物や金銭を鉢に受けること）を書き留めています。貞享五年（1688年）二月十六日、公慶上人が、町へ托鉢に出ました。その記録によると、町では、鉢銭一貫文ばかりを、めいめいで差し出したそうです。二月二十六日には、町から白米一石二斗を寄進しています。その年の四月二日から八日まで、釿初め（工事を始める儀式）がありました。

On the twenty-ninth day of the twelfth month of the fourth year of Jishō, Fujiwara no Kanezane recorded in his diary, the Gyokuyō, the day he heard the news. He was told, it is said, that the halls of Kōfukuji, Tōdaiji and others had burned to the ground. Kanezane wrote, "The grief of this time is deeper than losing one's father and mother." And he lamented, "In what age, at what time, will the Great Buddha be made again?" Afterwards, a Tōdaiji record says under the Great Buddha that Shunjōbō Chōgen gathered donations and built it. It was dedicated on the twelfth day of the third month of the sixth year of Kenkyū, 1195.

Much later, on the night of the tenth day of the tenth month of the tenth year of Eiroku, 1567, Matsunaga Hisahide of Tamon Castle attacked the Miyoshi Three, who were camped in the Great Buddha Hall. According to the Tamon-in Nikki, the fire of battle spread to the corridors. "Late in the night, the Great Buddha Hall burned in an instant."

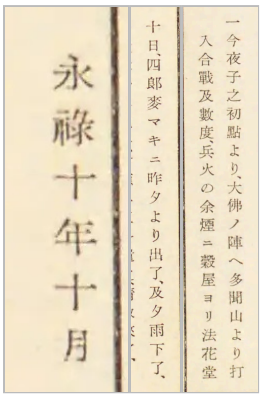
The records of the Inoue-chō district of Nara note the alms round (takuhatsu, in which priests go from house to house receiving food or money in their bowls) for rebuilding the Great Buddha Hall. On the sixteenth day of the second month of the fifth year of Jōkyō, 1688, the priest Kōkei came through the district on his alms round. According to those records, its people each gave, in all, about one kanmon of coins for his bowl. On the twenty-sixth day of the second month, the town gave one koku two to of white rice. That year, from the second to the eighth day of the fourth month, the ceremony to begin the building work was held.

れきしねた ガイドネタ帳 | Rekishi-Neta Guide Notes | © 2026 Rekishi-Neta

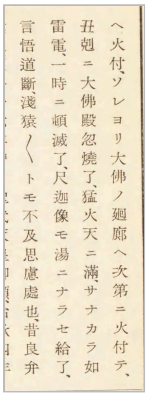
S10 海外から来たお客様　東大寺・他

お客様用

記録の言葉


永祿十年十月

一今夜子之初點より、大佛ノ陣へ多聞山より打入合戰及數度、兵火の余煙ニ穀屋ヨリ法花堂
十日、四郎麥マキニ昨夕より出了、及夕雨下了、


へ火付、ソレヨリ大佛ノ廻廊へ次第ニ火付テ、
丑剋ニ大佛殿忽燒了、猛火天ニ滿サナカラ如
雷電、一時ニ頓滅了、尺迦像モ湯ニナラセ給了、
言悟道斷淺猿〳〵トモ不及思慮處也、昔良弁

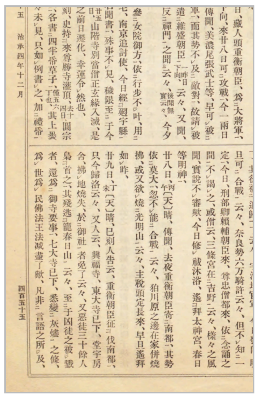
辻善之助編『多聞院日記 第2巻』（三教書院、昭和10年）

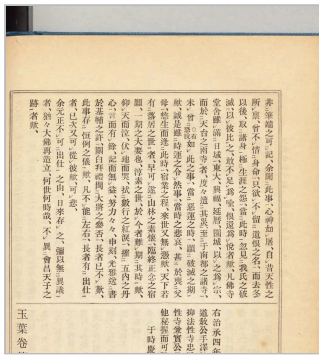
永祿十年十月／十日、／一今夜子之初點より、大佛ノ陣へ多聞山より打入合戰及數度、兵火の余煙ニ穀屋ヨリ法花堂／へ火付、ソレヨリ大佛ノ廻廊へ次第ニ火付テ、丑剋ニ大佛殿忽燒了、猛火天ニ滿、サナカラ如雷電、一時ニ頓滅了、

p.37・p.38

尺迦像モ湯ニナラセ給了

p.38





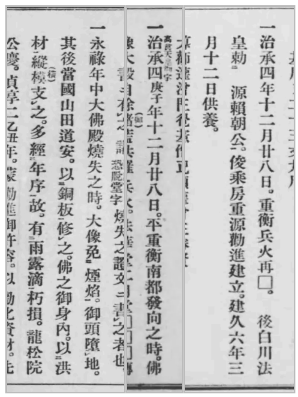
藤原兼実著・国書刊行会編『玉葉』第二（国書刊行会、明治39年）

治承四年十二月／廿九日、／巳刻人告云、重衡朝臣征伐南都、只今歸洛云々、又人云、興福寺、東大寺已下、堂宇房舍、拂地燒失、於御社者免了云々　p.455

當時之悲哀、甚於喪父母／仰天而泣、伏地而哭

p.456

猶々大佛再造立、何世何時哉　p.456


一治承四年十二月廿八日。重衡兵火再。後白川法皇勅。源賴朝公。俊乘房重源勸進建立。建久六年三月十二日供養。

一治承四庚子年十二月廿八日。平重衡南都發向之時。佛像燒失之時。大像免煙焰。御頭墮地。其後當國山田道安。以銅板修之。佛之御身內。以洪材縱橫支之。多經年序故。有雨露滴朽損。龍松院

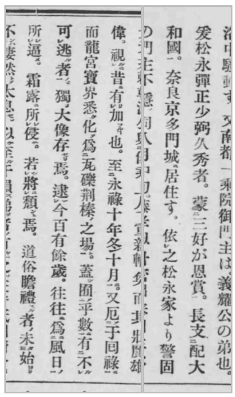
仏書刊行会編『大日本仏教全書 第121巻 東大寺叢書 第1』（仏書刊行会、大正11年）

一永祿年中大佛殿燒失之時。大像免煙焰。御頭墮地。其後當國山田道安。以銅板修之。佛之御身內。以洪材縱橫支之。多經年序故。有雨露滴朽損。　p.95

治承四庚子年十二月廿八日。平重衡南都發向之時。

p.91

治承四年十二月廿八日。重衡兵火再／後白川法皇勅。源賴朝公。俊乘房重源勸進建立。建久六年三月十二日供養。　p.371


愛松永彈正少弼久秀者。蒙三好が恩賞。長支配大和國。奈良京多門城居住す。

像。視。昔有加。也。至永祿十年冬十月。又厄于回祿。而龍宮寶界悉化爲瓦礫荊榛之場。蓋亟數有不。可逃者。獨大像存焉。逮今百有餘歲。往往爲風日所逼。霜露所侵。若將頹焉。道俗瞻禮。者未始。

仏書刊行会編『大日本仏教全書 第122巻 東大寺叢書 第2』（仏書刊行会、大正11年）

至永祿十年冬十月。又厄于回祿。而龍宮寶界悉化爲瓦礫荊榛之場。／獨大像存焉。逮今百有餘歲。往往爲風日所逼。霜露所侵。若將頹焉。　p.35

愛松永彈正少弼久秀者。蒙三好が恩賞。長支配大和國。奈良京多門城居住す。

p.300

れきしねた ガイドネタ帳 | Rekishi-Neta Guide Notes | © 2026 Rekishi-Neta

S10 海外から来たお客様　東大寺・他

ガイド用 ／ お客様にはお見せしません

東大寺の大仏殿は戦で二度焼け、そのたびに建て直しが始まった

⚠ 機微（#166）：戦で寺が焼けた話です。焼いた側と焼かれた側のどちらが悪いかを言わず、日記に書かれた言葉のとおりに伝えてください。

⚠ 機微（#133）：戦争（三好三人衆と松永久秀の戦い）と寺の焼失にかかわる。誰が焼いたかは記録の言い方のまま扱う

読み上げる文（お客様用の紙と同じもの）

東大寺の大仏殿は、戦の火で二度焼けました。一度目は治承四年（1181年）の十二月、平重衡が奈良へ攻め込んだときです。二度目は永禄十年（1567年）、大仏殿に陣取った三好三人衆を、松永久秀が夜討ちにしたときでした。

どちらのあとにも、建て直しが始まったのです。

The Great Buddha Hall of Tōdaiji burned twice in the fires of war. The first time was in the twelfth month of the fourth year of Jishō, 1181, when Taira no Shigehira marched on Nara. The second was in the tenth year of Eiroku, 1567, when Matsunaga Hisahide made a night attack on the Miyoshi Three, who had made camp in the Great Buddha Hall.

After each, rebuilding began.

治承四年十二月二十九日、藤原兼実は、知らせを聞いた日のことを日記『玉葉』に記しています。興福寺・東大寺などの堂は地を払って焼けた、と人が告げたそうです。兼実は「當時之悲哀、甚於喪父母」（いまの悲しみは、父母を亡くすよりも深い）と記しました。そして「猶々大佛再造立、何世何時哉」（大仏を造り直すのは、いつの世、いつの時になるのか）と嘆いています。その後、東大寺の記録の大仏の項には、俊乗房重源 が勧進（寄付を集めること）して建立したと記録されています。その供養は、建久六年（1195年）三月十二日でした。

時は下って永禄十年（1567年）十月十日の夜、多門城の松永久秀が、大仏殿に陣取った三好三人衆を攻めました。『多聞院日記』によると、戦の火は回廊へ燃え移ったそうです。「丑剋ニ大佛殿忽燒了」（夜更けに、大仏殿はたちまち焼けた）。

奈良の井上町の記録は、大仏殿の再建のための托鉢（僧が家々を回り、食物や金銭を鉢に受けること）を書き留めています。貞享五年（1688年）二月十六日、公慶上人が、町へ托鉢に出ました。その記録によると、町では、鉢銭一貫文ばかりを、めいめいで差し出したそうです。二月二十六日には、町から白米一石二斗を寄進しています。その年の四月二日から八日まで、釿初め（工事を始める儀式）がありました。

On the twenty-ninth day of the twelfth month of the fourth year of Jishō, Fujiwara no Kanezane recorded in his diary, the Gyokuyō, the day he heard the news. He was told, it is said, that the halls of Kōfukuji, Tōdaiji and others had burned to the ground. Kanezane wrote, "The grief of this time is deeper than losing one's father and mother." And he lamented, "In what age, at what time, will the Great Buddha be made again?" Afterwards, a Tōdaiji record says under the Great Buddha that Shunjōbō Chōgen gathered donations and built it. It was dedicated on the twelfth day of the third month of the sixth year of Kenkyū, 1195.

Much later, on the night of the tenth day of the tenth month of the tenth year of Eiroku, 1567, Matsunaga Hisahide of Tamon Castle attacked the Miyoshi Three, who were camped in the Great Buddha Hall. According to the Tamon-in Nikki, the fire of battle spread to the corridors. "Late in the night, the Great Buddha Hall burned in an instant."

The records of the Inoue-chō district of Nara note the alms round (takuhatsu, in which priests go from house to house receiving food or money in their bowls) for rebuilding the Great Buddha Hall. On the sixteenth day of the second month of the fifth year of Jōkyō, 1688, the priest Kōkei came through the district on his alms round. According to those records, its people each gave, in all, about one kanmon of coins for his bowl. On the twenty-sixth day of the second month, the town gave one koku two to of white rice. That year, from the second to the eighth day of the fourth month, the ceremony to begin the building work was held.

お客様にとっての発見

東大寺の大仏殿は治承四年と永禄十年の二度、戦の火で焼け、藤原兼実の日記や奈良の町の記録が残っています。お客様は、いま立っている東大寺で、焼けるたびに建て直しが始まった跡を、当時の人の言葉で見つけます。

れきしねた ガイドネタ帳 | Rekishi-Neta Guide Notes | © 2026 Rekishi-Neta

S10 海外から来たお客様　東大寺・他

ガイド用 ／ お客様にはお見せしません

語り方のコツ

- **「大仏は、焼けずに残ったのか」と尋ねられたら**

  「永禄（えいろく）の火のときのことは、諸説あります。『東大寺諸伽藍略録』では、大像は炎を免れたが頭が地に落ちたと伝えられ、『重興南都大仏殿碑記』では、大像だけが残ったと伝えられています」とお答えください。

どこまで断定してよいか

断定してよい

治承の火とそのあとについて

- 兼実は、重衡朝臣が南都を征伐し、興福寺・東大寺などの堂宇が地を払って焼失したと聞いた（藤原兼実著・国書刊行会編『玉葉』第二）
- 兼実は日記に、いまの悲哀は父母を喪うよりも甚だしいと書いた（同）
- 兼実は、大仏の再造立はいつの世、いつの時になるのかと書いた（同）
- 治承四庚子年十二月二十八日、平重衡が南都へ発向した（仏書刊行会編『大日本仏教全書 第121巻 東大寺叢書 第1』）
- 東大寺雑集録は大仏の項に、重衡の兵火のあと、俊乗房重源が勧進して建立し、建久六年三月十二日に供養したとする（同）

永禄の火について

- 多聞院日記は、兵火が大仏の廻廊へ移り、丑の刻に大仏殿がたちまち焼けたと書く（辻善之助編『多聞院日記 第2巻』）
- 松永弾正少弼久秀は、奈良の多門城に住んでいた（仏書刊行会編『大日本仏教全書 第122巻 東大寺叢書 第2』）
- 四箇大寺古今伝記拾要新書は、三好三人衆が多門城を攻め、大仏殿に陣取ったと書く（同）
- 同じ本は、十月十日の夜に松永が夜討ちをかけて回廊に火を懸け、余焔が大仏殿の軒に燃え付いたと書く（同）

貞享の托鉢について

- 貞享五年二月十六日、公慶上人の托鉢に、井上町は鉢銭一貫文ばかりを差し出し、二十六日に白米一石二斗を寄進した（高田十郎編『奈良井上町年代記抄』）
- 貞享五年四月二日から八日まで、斬初めと千僧供養があった（同）

「諸説ありますが」と置く

- **永禄十年の大仏殿の火で、大仏の像はどうなったか:** 東大寺諸伽藍略録は、大像は炎を免れたが、頭は地に落ちたとする（仏書刊行会編『大日本仏教全書 第121巻 東大寺叢書 第1』）
- **永禄十年の大仏殿の火で、大仏の像はどうなったか:** 重興南都大仏殿碑記は、大像だけが残り、百年余り風と日にさらされたとする（仏書刊行会編『大日本仏教全書 第122巻 東大寺叢書 第2』）

★言わない

- 焼いた側と焼かれた側の、どちらが悪いと言わないでください

この物語のもとになった小ネタ

- #166　平重衡（たいらのしげひら）の軍に奈良の寺々が焼かれ、藤原兼実（ふじわらのかねざね）は大仏の造り直しはいつかと嘆いた
- #133　永禄十年の夜、松永久秀（まつながひさひで）と三好三人衆の戦いの火で、東大寺の大仏殿が焼けた
- #167　公慶上人（こうけいしょうにん）が大仏殿の再建の托鉢に回ったとき、奈良の井上町は銭と白米を寄せた

番号は小ネタの紙の番号です。詳しくは、それぞれの小ネタの紙で。

記録の言葉

ほか引用 10 件は紙に載せていません（2ページに収めるため）

原本の画像を 13 枚載せていません（2ページに収めるため）

お客様用の紙には、原本の画像を 3 枚載せていません（2ページに収めるため）

辻善之助編『多聞院日記 第2巻』（三教書院、昭和10年） 一次

> 永祿十年十月／十日、／一今夜子之初點より、大佛ノ陣へ多聞山より打入合戦及數度、兵火の余煙ニ穀屋ヨリ法花堂／へ火付、ソレヨリ大佛ノ廻廊へ次第ニ火付テ、丑剋ニ大佛殿忽燒了、猛火天ニ滿、サナカラ如雷電、一時ニ頓滅了、 p.37・p.38

藤原兼実著・国書刊行会編『玉葉』第二（国書刊行会、明治39年） 一次

> 當時之悲哀、甚於喪父母／仰天而泣、伏地而哭 p.456
>
> 猶々大佛再造立、何世何時哉 p.456

れきしねた ガイドネタ帳 | Rekishi-Neta Guide Notes | © 2026 Rekishi-Neta